

# ほなひ歴史通信

第95号

2020(令和2).6.1

## 『事績集』の刊行に寄せて

このたび、『大子地域の旧町村長事績集』が大子町教育委員会から刊行された。昭和三十年（一九五五）三月の合併前まで継続した旧九町村の町村長を務めた人物の主な経歴や事績を、諸々の文献や新聞・雑誌等からの引用を基にして一冊の資料集にまとめたものである。この作成には平成二十一年（二〇〇九）から着手したので、十年を経てようやく終止符を打つたことになる。長い間その編集に関わった者として種々の思いが去来するが、どのような内容をもった資料集なのか、その一端を紹介したい。

明治二十二年（一八八九）四月に町村制が施行され、大子地域には新たな行政村として大子村、依上村、黒沢村、宮川村、生瀬村、袋田村、上小川村、下小川村が誕生した。二十三年八月には依上村から分村して佐原村が新設され、翌二十四年には大子村に町村制が施行された。こうして一町八か村が揃うことになるが、昭和三十年の町村合併までの六六年間に在任した町村長は合計一〇四名を数える。これらの町村長が資料集の主役である。

地域の牽引者でもある町村長の事績等を記録した本資料集からは、興味深い様々な事柄を読み取ることができる。二点ほど例示してみよう。まず一つは、出自についてである。昭和二十一年に町村制が改正されるまで、町村長は名誉職であり、原則として無給であった。したがって、町村長になるには、資産家であり地域の有力者であることが前提であった。大子地域もちろん例外

ではなく、多くの町村長が資産家であり、藩政時代の村役人という系譜をもつ家柄の出身者であったことが分かる。また、経済力や家柄は子孫にも継承され、同じ村のあるいは他の村の村長に就任する例が少なくなかったことも示されている。

二つ目は、手掛けた仕事である。その内容は実に多岐にわたるが、共通するのは道路改良、河川改修等のいわゆるインフラ整備である。大子地域がいかに劣悪な環境のもとにあったか、その改良のために町村長たちがいかに注力したかを所収した諸資料が鮮明に語っている。その一人、益子繁黒沢村長は、県庁に何度も足を運んで陳情を繰り返したため「道路村長」の異名をとったという。仕事といえば産業振興への取り組みも看過できない。不利な条件をどう克服し生産力をどう伸ばすか、新たな生産分野をどう開拓するか、多くの町村長が腐心しながらも成果を上げている。生産現場に身を置きながら豊かな知見を具えた町村長、例えば神長六介上小川村長は、蒞職の病害予防や楮の品質向上に貢献しただけでなく、生産者を組織して共同販売の途を切り開いた。昭和七年には、茨城「県産業界の至宝的存在」として「産業百人物」の一人に選ばれている。他にも、尽力した町村長として製茶業の吉成仁二、吉成誠、産馬改良事業の櫻岡敏、小室順太郎、製紙業の小室精作、養蚕業の高村千代吉、林業の益子繁等が例示できる。紙幅の都合でこれ以上の紹介は控えるが、本資料集の利用の便宜を図るために、巻末に「人名索引」と「付表 旧町村長在任期間一覧表」を添付したことを付け加えておきたい。

今から六年前、大子町は「消滅可能性都市」に位置付けられたことがある。「消滅」するかどうかはさておき、持続可能な地域を目指すには、その原動力として郷土への誇りと愛着が不可欠である。多くの方に本資料集を繙いていただき、今日の大子町の礎を築いた先人たちの営為を思いを馳せると同時に、誇りと愛着を培う手掛かりとして活用していただければ幸いである。（齋藤典生）

## 南会津の名倉坂に斃れた佐川彌次衛門

飯村尋道

私蔵に『幕末動乱遺聞』がある。その表紙に「亡き主人石井良一に代わって、石井松江」と添書があるのは、学生時代の昭和四十五年（一九七〇）の暮れ、田舎の母から東京の下宿に石井氏の急逝の知らせがあつたが帰省できず、翌年二月になって大子町金町のお宅に弔問に訪れた折、松江様から頂いた本だからである。その中に小生瀨の佐川彌次衛門に触れた箇所がある。

慶應四年（二八六八）三月、市川勢に加わつて会津に逃亡した諸生派の佐川彌次衛門は、「南会津の旭田村名倉沢の星という民家に一時身を隠し、十一月十五日の油しめの日に牡丹餅を貰つて同家を辞し、名倉坂で大雪に遭つて凍死した。昭和三十三年九月二十三日、その子孫の佐川義明は星家を訪問し、同家の好意で村の墓地に埋葬されていた遺骨を持ち帰つて佐川家の墓地に埋葬した」とある。

いったい佐川彌次衛門とは如何なる人物なのか。下野宮村の菊池糸之介が筆写した『諸生名前扣帳』（菊池家所蔵）に、市川三左衛門配下の「太田郷校詰、陣將相羽九十郎」の「十一番組」の二一名の中に糸之介と同じく「佐川彌次衛門」の名前があり、小生瀨村の「御山横目、大指引」とある。彌次衛門は諸生派として天狗党の追討に従軍している。

山方村の諸生派小河原理介が筆写した『出陣日記』（菊池家所蔵）に「（元治元年十月）廿六日晴、太田（市川三左衛門様）並び馬場村（伊藤辰之介様）御繰出し小生セ村佐川彌次衛門方中食、其ヨリ月居峠へ相詰候」の記述がある。即ち大子村屯集の武田耕雲齋から天狗党一千余名を追撃するため、二十六日に太田を発つた市川勢が天下野村を経て堺ノ明神峠から小生瀨村に入り、彌次衛門宅

で昼食をとり、月居峠の戦いへと駒を進めている。

『棚倉沿革私考』（明治三十三年）に月居峠の戦いの四年後である「慶應四年戊辰、水戸の市川三左衛門・朝比奈弥太郎等、水戸を去り会津若松へ入るとして三月十五日、伊香泊にて棚倉を通行せり人数五百人許、多人数召連奥州会津筋に脱走」とある。明治維新で正奸が逆転し諸生派は「脱奸」などと蔑視され、身の危険から他国へ逃げて辛酸を舐め尽くした。彌次衛門もこの市川勢に加わり会津に逃げたのだろう。

彌次衛門の旧居は旧天下野街道の小生瀨宿の外れにあり、当主の案内で佐川家先塋を訪ねた。彌次衛門の墓標は土饅頭で卒塔婆が立っている。「父が桐の木を切つて金に換えて会津に行き、先祖の埋まつていた土を持ち帰つたと聞いている」という。

彌次衛門の父母らしき「光明慈照清信士（俗名佐川彌次衛門）墓」と傍らの「高巖妙脱清信女墓」は痛々しく割れ裂けてセメントで繋ぎ合わせてある。県北に多い大黒柱等への刀傷や墓石への嫌がらせも、維新前後の天狗諸生双方による報復の痕である。

他郷で斃れた彌次衛門、今は父祖の地で安らかに眠っている。土饅頭に手を合わせ佐川家先塋を後にした。

（常陸大宮市山方在住）



彌次衛門の土饅頭（小生瀨）

## 私のマラソン人生（四）

小室健二

私は、これまでのマラソン人生の中で色々な経験をさせていただきました。

昭和四十年（一九六五）ごろ、東京から新潟駅伝競走大会に茨城県代表として出場しました。その前年に新潟大地震があり、コース内の道路は地割れしてそこに砂を詰めた状態で、道路わきの建物は窓くらいまで沈んでいるところもありました。三日間で東京から新潟まで走り、閉会式の後、地震の時の記録映画を見て心ばかりの協力を金で送らせてきました。

本誌九四号に書いた青森から東京までの駅伝では、走る前日自分の走る区間近くの指定された宿に他県の選手と一緒に泊まり、夕食時にお互いの記録の話が出ると、ベテラン選手は若い選手にプレッシャーをかけてきました。心理作戦です。それは、新人選手にとってはブレーキになることもありました。走り終われば監督車から自分の荷物を受け取り、電車でその日の宿舎まで移動しました。付き添いも誰もいない自分一人の旅でした。

現在、正月元旦に行われているニューイヤーマラソンの前身である全日本実業団対抗駅伝は、以前は伊勢神宮で行われていました。日立製作所チームとして出場し、走った後はお伊勢参りをさせていただきました。

下小川走友会では、昭和五十八年から一一年連続で富士登山駅伝に出場しました。御殿場駅前をスタートして富士山頂上を折り返す九区間往復約四七キロメートルを五人で走る駅伝です。「雲海を走る」をキャッチフレーズに、駅伝としては珍しく、往路を走った選手がその区間で待っていて復路も同じ選手

が走るといふものでした。頂上区間の選手は登って行って頂上の浅間神社でタスキに印を押しもらって復路に入ります（往復して一区間）。

四区（六区）と五区の富士山を走る選手は高山病対策のため前日に山に登り、山小屋に泊まり次の日に走りますが、それでも高山病になる選手もいました。登山道（コース）は一般の登山客も歩いているので、登山客優先という規則でした。砂走りは火山灰に膝までもぐる程になり、下りコースではタスキを渡しても止まらなくて自分で転ぶしかありません。私はどの区間も走りましたが、頂上区間は呼吸が苦しいよりも胸が痛くなってきました。山から下りて一般道に続く七区は、下り勾配がきつくて足でブレーキをかけながら走りました。足の裏の皮が両足全面はがれて走り終わって歩けなくなった選手もいました。それでも日本一の富士の山を走破したいと思うチームは多く、下位チームは入れ替えをされる程参加希望チームは多数でした。四十歳代になってマスターズ世界大会に参加し五千メートル、一万メートルに出場しましたが、五千メートルで同じ年齢

の元オリンピックマラソン代表の君原健二選手に勝てたことは自分の最高の走りができたからだと思います。

自己満足ですが、マラソンを続けてきたことが私の人生の大きな生き甲斐であると考えています。

（大子町西金在住）



## 大子自動車株式会社の軌跡（前）

大金祐介

近代を代表する交通機関と言えば鉄道だろう。我が国では、貧弱な道路に代わって、鉄道が輸送の主力を担っていた。山間部に位置し、悪路の多かった保内郷においては、なおさら鉄道が注目されていた。そのため、常陸大子駅が開業するまで、大子と最寄りの鉄道駅とを乗合自動車（バス）で結び、大子にとって重要な水戸方面への交通を担っていた大子自動車株式会社のことは、あまり知られていない。今回は、大子町長益子彦五郎の回顧録「最近大子記事并ニ余町長ノ事績」や『いはらき』新聞などの史料に基づいて、大子自動車株式会社の歴史をご紹介します。

大正七年（一九一八）十一月六日、誉田村（現・常陸太田市）の小池丑松が大子大宮間を含む複数の路線で乗合自動車業（自動車による旅客運送業）の営業免許を取得した。小池は、明治三十七年（一九〇四）に太田町を拠点として乗合馬車業（馬車による旅客運送業）を開業し、その後、乗合自動車業に進出した、県北地域における乗合馬車、乗合自動車業の草分け的な人物である。

大子の人々は、小池に刺激を受け、自らも大子大宮間で乗合自動車業を開業しようと計画した。益子彦五郎の回顧録によると、当時、外池太一郎、菊池信太郎、川口利吉、松浦栄次郎、益子銀次郎、益子彦五郎らのグループ、大金竹次、浅野政禧、江部仲吉らのグループ、樋口政次郎の三者が計画していたという。彼らは、競合を懸念し、大正八年一月十日、時の大子町長益子彦五郎の仲介のもと大子町役場に会同し、外池らのグループと大金らのグループが合同することを決めた。樋口は、合同グループには参加しなかったが、競合を避けて大子馬頭間で開業を目指すことになり、大正八年二月に営業免許を申請し、同年四月に開業した。

合同なった外池らは、大子大宮間で営業免許を申請したが、既に小池が取得していることを理由に却下された。このため、外池らは、小池に営業免許の譲渡を求めたことにした。菊池信太郎、益子銀次郎らが小池と交渉した結果、営業免許と自動車一台を五千八百円で譲り受けることになった。双方の合意が成立したのは、大正八年五月十日のことだった。営業免許は、県の管轄で、取得するにも譲渡するにも県知事の許可を必要とした。このため、合意成立後の五月十二日、益子彦五郎らは小池と共に県警察部保安課を訪れ、譲渡を申請した。その結果、五月末日までに許可を得て譲渡が完了し、外池らは大子大宮間で乗合自動車業を開業した。開業を主導したのは外池らだったが、乗合自動車の運行はそれまで大子町で乗合馬車業を営んでいた菊池熊太郎が担った。小池は、譲渡直前の四月九日に、大子大宮間で乗合自動車業を開業していた。大子大宮間をフォードの六人乗り自動車で一日一往復し、大宮で鉄道に連絡するというものだったが、運行は毎日ではなく不定期だった。外池らは、不定期運行では真の交通機関とは言えないと考え、一日一往復の定期運行を行った。

なお、乗合自動車の運行にはガソリンが欠かせないが、ガソリンの供給は、ニューヨーク・スタンダード石油会社の特約販売店だった大子町金町の吉見屋商店が担っていたようである。

県内で乗合自動車が始めて運行されたのは大正二年七月開業の高部自動車合資会社による御前山野口間だったが、本格的な運行は大正七年七月開業の本橋自動車商会による水戸市内及び水戸駅前磯浜間だったという。大正八年五月の外池らによる大子大宮間開業は、県内でもかなり早い事例であると言えるだろう。

外池らの乗合自動車業は、個人事業として開業したが、開業二年後の大正十年に法人化された。それが大子自動車株式会社である。法人化とその後については、紙幅の都合上、後編に譲りたい。

（大子町大子在住）

## 大生瀬打越地区の農事今昔

齋藤仁司

約六十年前の昭和三十年（一九五五）代、農業はほぼ手作業であった。水田は万能で耕し、畑は鋤で作業した。動力といえるのは、古くは馬、その後は牛で、犁（鋤）や荷車等を引かせて使った。

主な作物は、米の他、麦類、たばこ、蒟蒻、楮、豆、野菜等である。移動は、もっぱら足である。山道等は梯子やタガラで背負って物を運んだ。平地は先述の荷車である。普段は、家族単位で作業し、水苗代の苗取り、田植えやたばこ伸し等は共同作業である。これを結（ゆい）と呼んだ。結の単位は、主に五人組である。これは、五戸が一緒に諸事に当たり行動する制度である。

昭和四十年代に入ると耕運機が出回り、牛は肥育目的と変わる。耕運機は、農耕の他、トレーラーを引き、多くの荷を運搬した。昭和五十年代には、軽（小型）トラックが目立つようになる。昭和六十年代には、さらに機械化が進み、町の補助事業を受け水田の土地改良が行われるようになった。また、機械の大型化がさらに進化した。

平成七年（一九九五）、国、県及び町の補助事業としての土地改良が着手され、農業の近代化が始まる。この事業は、五年間を経て平成十一年に完結する。

この土地改良事業を詳しく見てみよう。

二五年前、平成七年四月十八日「奥久慈区域農用地総合整備事業計画について」の公文書が、奥久慈区域農用地総合整備事業推進協議会長、大子町長黒田宏、農用地整備公団奥久慈建設事業所所長高瀬寛之の連名により発出され、行政窓口は大子町農政課農用地総合整備係であった。

本文によると、「平成五年十一月四日付農林水産大臣から認可

された」とあり、第一から第六までの換地地区が計画されたことが読める。町の肝入り事業で各地区で行われ、アップルライン等も同事業で完工した。

大生瀬地区においても、平成七年六月十三日午後七時から大生瀬坂西集会所で説明会が開催された。当日の資料の「大生瀬四総事業費及び償還額」を見ると、耕地面積水田〇・六ヘクタール、畑〇・四ヘクタールの一ヘクタールで、事業費農家負担水田一六〇四万円、畑一六八万八千円、負担割合は、国四五パーセント、県三〇パーセント、町一〇パーセント、受益者一五パーセントで、一五年元利均等年賦金償還の年償還額は、反当たり水田三万六千円、畑三千円であった。

平成七年七月二日時点で、事業申込者当初九名（戸）は、同年九月二十八日には六名に減り、翌八年四月八日に「大生瀬第四工区農用地整備組合」が組合員五名で設立された。その後、四年間を経て工事等が進められ、十一年六月二十五日の同組合総会で換地処分登記の登記済証を受領した。

私の登記済証によると、換地前には田四筆で一五三六平方メートルであったものが、換地後は田三筆で一三二六平方メートルになった。

同組合は、組合員五名の総意により三十年十月に解散し、今日に至る。完工後二〇年で離農・耕作放棄地が増えた。

前期高齢者の我が家の農業機械は、トラクター、田植機（歩行）、バインダー、ハーベスターであるが、この事業が完結した頃から打越地区ではトラクターや乗用田植機、コンバイン等の大型農機が導入されるようになり、農作業の近代化が一層進行している。

この六十余年で生活は大きく変わった。さらに、五十年後、地域がより良くなっていることを願うが、高齢化社会に伴い農業の後継者の問題があり、行政等のさらなる対策・支援等が望まれる。

（大子町大生瀬在住）

## 公家社会で話題になった袋田の滝の歌

袋田の滝は江戸時代の頃から広く知られ、文人墨客や貴人が訪れる景勝地でした。この袋田の滝を詠み込んだ歌として、次の三首がよく知られています（「常陸国北郡里程間数之記」、以下「常」と略）。

花もみち 経緯（よこたて）にして 山姫の

錦織出す 袋田の瀧

西行法師

いつの世に つゝみこめけむ 袋田の

布引出す しら糸の瀧

徳川光圀

もみち葉を 風にまかせて 山姫の

しみつをくゝる ふくろ田の瀧

徳川斉昭

いずれも著名人の歌であり、紅葉を背景に美しく映える袋田の滝の情景を詠んだものとして、広く知られています。しかし、西行、徳川光圀の歌は、本人が確実に詠んだという記録は無く、「土人」によって語り伝えられてきたものでした（「常」）。そこで今回は、水戸藩主が確実に詠んだものとして一番古い袋田の滝の歌を紹介します。それは、三首目を詠んだ九代藩主徳川斉昭の父、七代藩主治紀（はるとし）のものでした。

文化三年（一八〇五）に藩主に就任した治紀は、藩政に積極的に取り組まれました。特に、軍政の改革や軍事訓練に力を入れたことは、武公という諡号（おくりな）からも知られています。治紀が藩政を担い始めた頃、水戸藩は長年にわたる財政難に苦しんでおり、それまでの歴代藩主の多くがほとんど水戸に来る機会を作れず、江戸での生活を続けていました。そのような状況の中でも、治紀は水戸への御国入り（就藩）を希望し、文化六年に、十九年振りとな

なる藩主の水戸入国を果たしました。

治紀は、就藩中の九月、領内巡視の一環で袋田の滝を訪れます。ちょうど紅葉の時期であり、滝の流れと紅葉の色鮮やかさが織りなす風景を見て、その美しさに深く感動しました。「近江国石山寺のように紅葉の名所として昔から知られているところはあるが、この袋田の地のように滝の隙間まで細やかに紅葉が入り込んでいる所はおよそ日本では無いであろう。袋田の滝は日本一の絶景である」と褒めたたえています（「新能布乃多根」、以下「新」と略）。

実は、この武公・治紀は、武だけではなく、和歌にも造詣の深い殿様でした。就藩中に訪れた先々でも、度々歌を詠んでいます。袋田の滝を訪問中に、先述の光圀の歌の存在を知った治紀は、自分でも次のような歌を詠じました。

水の糸を 紅葉のひまに 引はへて

錦織るてふ 袋田の滝

徳川治紀

先ほどの光圀の歌を意識しつつ、布から引き出した糸のような滝の流れと紅葉の鮮やかさが、まるで錦を織りなしているようにだと風景の美しさを率直に読み込んでいます。先の西行の歌にも通ずる美しい表現で、滝の様子が表されています。

この袋田の滝の歌は、遠く京都の公家社会（堂上）でも話題になったようです。この歌が高く評価されたため、治紀は公家の間で「袋田の宰相」と呼ばれたと伝わっています（「新」）。

最後に、「袋田の宰相」治紀の歌を受けて詠まれた、当時の一流公家歌人・外山光実の和歌を紹介します（「常」）。

（題）「袋田の瀧のほとりに紅葉したるを」

しらいとに にしきましへてさらせるは

もみちこきいく 袋田の滝

外山光実

（藤井達也）

## 水郡線と西金駅

今年度から『ほない歴史通信』の事務担当となりました神長敏(さとし)と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

『ほない歴史通信』は年四回発行の季刊誌であり、本号が第九五号ですので、来年には創刊百号を迎えることとなります。これまで様々な方が筆を執られ、また町内外の多数の方々に愛読され支えられてきたことに対し、深い敬意の念と愛着を感じるものです。

私はこの四月に着任後、『大子地域の旧町村長事績集』という資料集が、大子町歴史資料調査研究会の編集により大子町教育委員会から発行されたばかりであることを知りました。この本は、大子町が昭和三十年に合併する以前の一町八か村において活躍された町村長のプロフィールを一冊にまとめたもので、本誌の冒頭で編集の中心となった茨城大学名誉教授の齋藤典生先生が構想から刊行まで十年間を要した間のエピソードを回想しておられます。

この本の中で、大子町に鉄道(現在の水郡線)を開通させるために、いかに町村長たちが団結して誘致運動を展開したかの記事が随所に盛り込まれておりますが、このことに私は非常に興味をそそられました。

私の家は西金駅まで徒歩数分という所にあり、町道を挟んで水郡線の線路はすぐ下に、また、その先には清流久慈川の流れがあります。

昨年十月に東日本を襲った台風十九号は大子町にも大変な惨禍をもたらし、常陸大子駅と袋田駅間の第六久慈川橋梁が崩落し、水郡線は現在も西金駅から常陸大子駅間で不通となっております。先日、私は錆びた線路を見て、もう半年以上走っていないんだなあとしみじみと感じました。

高校時代は三年間水郡線を利用しました。今から四十年余り前になりますが、西金駅には駅員さんがおりました。私が朝、通学のため乗った列車は、記憶では九両か十両編成であったと思います。通勤、通学客で混雑していて西金駅でも座るのが大変で、私は大子方面からの友人が席を確保してくれていたのので助かりました。また、現在の車両と違って、重いドアを自分の手で開けなければなりませんでした。

毎日、西金駅を利用していたわけですが、西金駅は水郡線の中で他の駅と違って点があることを当時から何でだろうと不思議に感じておりました。それは、西金駅のホームと改札口に高低差があつて、その間は階段があることです。西金駅は男体山の登山口の駅なので、それでお洒落にこのようになっていくのかなと当時は考えたこともありました。

『大子地域の旧町村長事績集』には、水郡線の開通に関する記述が随所にあると記しましたが、下小川村の項の興味深い内容を挙げさせていただきます。

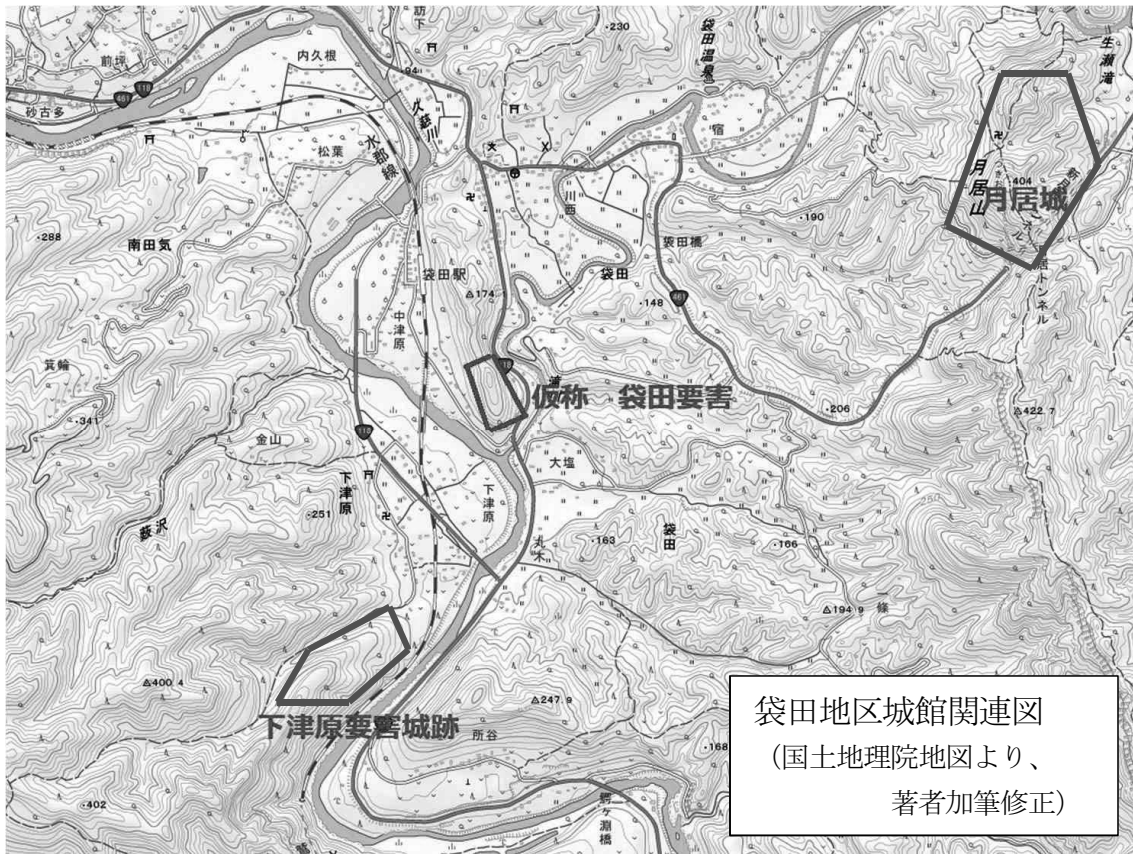
西金駅前には、「感謝之碑」という石碑が建立されております。その碑文には、「大正十年(一九二一)大郡線(水郡線の当時の呼称)常陸大宮、大子間の鉄道線路測量が開始された時、西金地内には停車場の予定が無かった。これを知った西金区民は一致団結して駅増設運動に立ち上がり、(中略)運動開始五ヶ年にして漸く駅増設の決定を得た。(中略)ついに大正十五年三月二十一日西金駅の開通を見た」とあります。この前年の十四年八月に山方宿駅から上小川駅まで開通していますので、西金駅はこの後にできたものだということになります。

水郡線のことについては、また次の機会に書かせていただけたらと考えております。

(神長敏)

# 大子町の新発見城郭その三・袋田要害について

五十嵐雄大



袋田地区城館関連図  
(国土地理院地図より、  
著者加筆修正)

今回は、去年発見された大子町袋田地区の城館（仮称袋田要害）について紹介させていただきます。この城館は、袋田字小磯・中津原道上にある標高一七〇メートルの山上に位置します。立地としては、久慈川と滝川の合流点の山上という城を造るのに最適な場所に構えられています。遺構は、山上に深さ最大二メートル、幅三・五メートルの堀切が一本あるだけであとは自然の岩山です。南側に愛宕神社があり、この辺りが居館であったと思われる。

歴史的に見ると、戦国時代には野内氏が月居城と下津原にいたことが確認されています。このため、本要害は、両城をつなぐ物見台ではないかと考えています。一六世紀前半の佐竹氏の内紛である部垂の乱の際、佐竹義篤から野内氏に宛てた、「宇留野源五郎が来ても中に通すな」という古文書が残っており、袋田地域も戦乱に巻き込まれる可能性が出てきました。袋田要害は、この緊張状態の時に急造されたものかもしれません。

（茨城城郭研究会）

## 編集 大子町歴史資料調査研究会

齋藤 典生（大子町歴史資料調査研究員）  
井上 和司（大子町歴史資料調査研究員）  
藤井 達也（大子町歴史資料調査研究員）  
藤田 貴則（大子町教育委員会事務局）  
神長 敏（大子町教育委員会事務局）

## 発行 大子町教育委員会

大子町立中央公民館内

久慈郡大子町大字池田二六六九番地

発行日 令和二年（二〇二〇）六月一日  
0295(72) 1148